論　文

立教大学観光学部紀要　第16号　2014年3月
Rikkyo University Bulletin of Studies in Tourism No.16 March 2014
pp. 64-73.

ヒルステーションのグローバル化と気候条件
―ヌワラエリヤを事例に―

Globalization of Hill Stations and Climate:
A Case of Nuwara Eliya

稲　垣　　勉*
INAGAKI, Tsutomu

Abstract: Hill stations are heritage of colonial era. Currently Hill Stations are confronting globalization. One of aspects of globalization is diversification of tourist's background. An emergence of Middle–eastern tourists can be observed in some specific hill stations, though they do not relate to those places historically or culturally. This article's main focus is a relationship between hill stations and its climate. From a case of Nuwara Eliya（Sri Lanka）, we try to define a meaning of climate of hill stations to Middle-eastern tourists.

Key words: ヒルステーション（hill stations），ヘルスリゾート（health resorts），気候（climate），ヌワラエリヤ（Nuwara Eliya），グローバル化（globalization），中東観光客（Middle-eastern tourist）

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　生活空間の周期的移動とヒルステーションの成立
Ⅲ　ヒルステーションと気候条件
Ⅳ　ヒルステーション類型と発展段階説の検討
Ⅴ　ヒルステーションのグローバル化―スリランカの事例

Ⅰ　はじめに

植民地の大きな構成要素であったヒルステーションの多くは，植民地の終焉を乗り越えて，第2次大戦後も新たに誕生した国民国家の中で存続し続けることとなった．現在ヒルステーションが置かれている状況は，大きく2つの側面に区分することが出来る．第1は国民国家によるヒルステーションの「取り戻し」である（稲垣，2013）．ことに旧植民地の経済発展と所得の向上，ひいては観光を享受しうる階層の拡大によって，ヒルステーションは独特の性格を持った観光地として国内観光のなかで大きな位置を占める例が多い．

第2はヒルステーションを訪れる外国人観光客の多様化である．従来想起されがちだった宗主国の観光客によるノスタルジックツアーに加え，西欧からの観光客の発地も多様化している．また中東地域などヒルステーションの発生，発展となんら関係を持たない地域からの入り込みも増加し，グローバル化が急速に進んでいる．この背景には従来観光客送り出しの中心であった西欧諸国ばかりでなく，ロシア，東欧，中東諸国の経済発展と，それにともなう大衆観光需要の形成がある．

国内観光，国際観光を問わず，ヒルステーショ

＊立教大学観光学部・教授

ンが観光客を吸引する理由の多くが，植民地期に形成された擬似西欧的景観と，標高にともなう気候条件，それによって生み出される温帯的植生など，平地部とは大きく異なる環境であることは否定できない．本稿ではことに中東からの観光客の動向に着目し，ヒルステーションに来訪する観光客の主体が変化することで，一定の方向で機能すると考えられていたヒルステーションの気候条件が，観光主体に応じて異なる文脈に置かれることを指摘する．同時にそれを通じて気候の持つ相対的性格を明らかにしようと試みる．さらに Mitchell の所論（Mitchell, 1972）の批判的検討を通じて，グローバル化の中でも，ヒルステーションが制度あるいは現象としての性格を維持し続けていることについて論じることにしたい．

Ⅱ　生活空間の周期的移動とヒルステーションの成立

ヒルステーションの多くは英国によって建設された[1)]．これが 19 世紀以降の英国による帝国主義的拡張の所産であることは疑問の余地が無い．英国がシムラ（Shimla），ダルハウジー（Dalhousie），ダラムシャーラ（Dharamsara）など，ヒルステーションが多数立地するヒマラヤ南麓，現在のヒマチャル・プラデーシュ州に，最初に注目したのは，19 世紀初頭のシークと侵入してきたグルカとの紛争に介入したときに遡る（Pubby, 1988）．最初のヒルステーションの事例と言われるシムラは 1817 年，測量隊の将校であったジェラード兄弟（Patrick and Alexander Gerard）によって発見されている．新たに英領となった北部州における測量と地図作成の過程での出来事であった（Kanwar, 1990）．

最初のバンガローが 1819 年に建設され，その後シムラは次第にヒルステーションとしての体裁を整えることになった．インドにおける英国の帝国主義的拡張が進展するにつれ，1850 年頃から新しい傾向が見られるようになる．地方行政機能を一定期間，近隣のヒルステーションに移転させるという傾向である．マドラス政府はウータカムンド（Ootacamund）へ，ボンベイ政府はマハバレーシュワ（Mahableshwar）とプーナ（Poona）へ，ベンガル政府はダージリン（Darjeeling）へ，北西州およびオウド政府はナイニタール（Naini Tal）へと一定期間行政機能を移転し，それにともなって官吏も一時的な移住を行うようになっていく（Kanwar, 1990）．

シムラにおいても，英領インドの全体の「夏の首都」とすべく，次第に移転する政府部門が増加し，同時に一時的に移住する官吏も増加していった．この結果，1864 年にシムラはインドの「夏の首都」を宣言するに至る．シムラに代表されるヒルステーションの発展は，英国のインドにおける帝国主義的拡張と植民地経営の進展と軌を一にしている．行政機能と官吏の一時的な移動という事実からしても，ヒルステーションは沿岸植民都市の苛烈な気候を避けるための，生活空間の周期的移動によって特徴付けられていたとみなすことが出来る．ヒルステーションの発展は前述の諸都市の例でも明らかなように，この周期的な移動がより広範な広がりを持ち，制度化していく過程である．ヒルステーションを構成する基本的な要素が周期的な移動であるという事実は，ヒルステーションが移動の受け皿としての単なる空間ではなく，社会的な運動であり制度であることを示しており，ヒルステーションを現象として捉えうる証左となっている．

Ⅲ　ヒルステーションと気候条件

一方ヒルステーションの起源を歴史上さらに遡ろうという議論も存在する．Mitchell はヒルステーションの起源を，古代地中海世界の「移牧」（transhumance）に求めている（Mitchell, 1972）．季節にともなう生活拠点の周期的な移動という点からみる限り，ヒルステーションと移牧との間には，形態上一定の類縁性を見ることが出来よう．さらにこの周期的な移動を引き起こす要因は，季節変化にともなう牧草の入手可能性という生産上の必然性である．

「移牧」とヒルステーションの形態上の類似性を指摘するものの，Mitchell は「移牧」とヒルステーションの直接の結びつきには言及していな

い．むしろヒルステーションとの具体的な関連が強調されているのは，療養，健康のための転地である．Mitchell はかなりの紙幅をさいて，コレラ，赤痢，天然痘などの伝染病，マラリアなど感染症，フィラリアや鉤虫などの寄生虫症のインドにおける罹患率が高いことを論じ，これらの疾病と高温多湿にともなう熱中症，体力減耗への危機感が，気温が低くより快適と考えられていた高地への一時的移住の背景となり，沿岸植民都市に適合しない英国の生活様式の維持欲求と相まってヒルステーションの成立をうながしたと主張している[2)]．

実際インドにおいて多くのヒルステーションが建設された19世紀中期に先駆け，19世紀初頭から熱帯の疾病とそれへの対策，こと気候療法は社会的関心を集めており，多くの論考が発表されている．論考の多くは気温の低い地域への転地の効果を喧伝している（Moore, 1881；Hardwicke, 1883）．この傾向は20世紀初頭まで続きインド以外の英領植民地，旧仏領インドシナなどのヒルステーション開発に影響を与えた（Giles, 1904；Sandwith, 1907）．

以上の気候条件とヒルステーションの成立に関する論理的展開は，多くのヒルステーション研究で同様に指摘されるところであろう．いわばヒルステーション成立の基盤に関する，共通理解とみなして良い．この理解で特徴的なのは，標高にともなうヒルステーションの気候条件が，植民者達にとって異化されたものではなく，むしろ身体的になじんだものであったという点であろう．ヒルステーションの発見と建設は植民者たちにとって，他者の場所である沿岸植民都市に抗して，植民地の山中に「自らの気候条件」とそれが生み出す「自らの環境」を見いだし，生活空間として再構成する行為であった．ヒルステーションの大きな特徴である「風景の発見」もこれを基盤に生じている（稲垣，2007）．風景の発見の事例は枚挙に暇ないが，後段で論じるヌワラエリヤ（Nuwara Eliya）を例にとっても，同地域についての最初の報告者である Baker はヌワラエリヤ周辺にサセックス（Sussex）の風景を「発見」している（Baker, 1874）．表1は帝国主義的版図のもとでの，気候類型を示したものである．代表的なヒルステーションであるシムラは，英国に対応する気

表1　植民地期の気候類型

気候類型	気温/湿度	都　市
Hot and Very Dump	気温22.8℃以上/湿度81％以上	バタビア，カメルーン，モンバサ
Hot and Moderately Dump	気温22.8℃以上/湿度66～80％	ハバナ，カルカッタ
Hot and Dry	気温22.8℃以上/湿度51～65％	バグダッド，ラホール，ハルトゥーム
Hot and Very Dry	気温22.8℃以上/湿度50％以下	ワディ･ハルファ
Warm and Very Dump	気温14.2～22.2℃/湿度81％以上	ウォルヴィス･ベイ，アリカ
Warm and Moderately Dump	気温14.2～22.2℃/湿度66～80％	リスボン，ローマ，ダマスカス，東京，ニューオルリンズ
Warm and Dry	気温14.2～22.2℃/湿度51～65％	カイロ，アルジェ，キンバリー
Warm and Very Dry	気温14.2～22.2℃/湿度50％以下	メキシコ，テヘラン
Cool and Very Dump	気温0.6～13.9℃/湿度81％以上	グリニッジ，コチャバンバ
Cool and Moderately Dump	気温0.6～13.9℃/湿度66～80％	ウィーン，メルボルン，トロント，シカゴ
Cool and Dry	気温0.6～13.9℃/湿度51～65％	タシケント，シムラ，シャイアン
Cool and Very Dry	気温0.6～13.9℃/湿度50％以下	ヤルカンド，デンバー
Cold and Very Dump	気温0.0℃以下/湿度81％以上	ベン･ネヴィス，サガスティル，ゴットホープ
Cold Moderately Dump	気温0.0℃以下/湿度66～80％	トムスク，パイクスピーク
Cold and Dry	気温0.0℃以下/湿度51～65％	
Cold and Very Dry	気温0.0℃以下/湿度50％以下	パミール

資料：（Ward, 1900）より作成

候類型に置かれている．

ヒルステーションの成立過程では，通常何回かの変遷が観察される．Tyagi はこの過程を，形態学（morphology）と言う概念を用いて，きわめてマクロの視点から概観している（Tyagi, 1991）．しかし観光研究上もっとも注目すべきは，先住民の領域から植民地へ，さらには国民国家へと言うマクロの変化ではない．重要なのは地政学的あるいは戦略的色彩の強い発見から，気候条件を利用した治療の場として成立し，さらには余暇を主目的とする場へと転化していくミクロの過程であろう．Mitchell もヒルステーションはサナトリウムなどでの熱帯病の治療の場から，健康上危険の多い沿岸植民都市での生活を避ける予防の場へと，短期間に変化したと指摘している．この理解を前進させた Kennedy は，疾病治療や暑さにともなう消耗の回復などの身体的理由に加え，ヒルステーション行きの目的として日常生活からの一時的離脱や目先を変えるという精神的な役割が付加され，それが植民者の間でファッション化したことを指摘し，それを「medicalization of leisure」と呼んでいる（Kennedy, 1996）．ヒルステーションへの一時的な生活の移転が熱帯病の治療と予防という身体的必然性を越えて，いわばレジャーの場として心身相関的な必然性をもったところから，現在につながるヒルステーションの性格が決定されたと考えることが出来よう．

Ⅳ　ヒルステーション類型と発展段階説の検討

Mitchell のヒルステーション研究は，研究領域の確立という点から見て，きわめて重要な転換点であった．また提示された諸問題も現在まで続く，研究の枠組みを決定する上で大きな役割を果たしている．しかし戦後ヒルステーションが置かれることになった状況を十分説明しているとは言いがたい．また発表時期がヒルステーションを擁する新興国の急速な経済発展以前の段階だったとはいえ，現在のヒルステーションの状況に対する説明力にも疑問が残る．

Mitchell の議論はヒルステーションに対する発展段階的理解と類型化を２つの軸として展開されている．発展段階を構成する基本的要素はヒルステーションの利用者と，ヒルステーションを構成する施設およびその機能である．周辺集落をはじめ植民地一般を視野に入れた外部との財・サービスフローは，各段階を区分する要因として特に強調されている．まず Mitchell にしたがって，ヒルステーションの発展段階をまとめることにしよう．

Mitchell の所論ではヒルステーションの主たる利害関係者は英国軍人と英国人植民地官僚であり，時代を追ってインド人支配層，宣教団，第２次大戦後はインド人上層中流階級が参入し，さらにインド人下層中産階級へと拡大することで性格が変化し機能も変わっていったと論じる．第Ⅰ期とされるのは，発見から軍の駐屯，英国人植民地官僚に利用が限定されていた創成期である．その後，インド人支配層の別荘が建設され，宣教団による一定の社会開発が行われ避暑の場としての体裁が整う．さらに英国人子弟を対象とした教育機関が設置され教育機能も取り入れられていく．一部のヒルステーションでは軍司令部が置かれ，行政機関が一時移転して「夏の首都」として機能し始める．この時期を第Ⅱ期と規定している．

20 世紀に入ると一定の範囲で現地化が進行する．地方行政組織が作られ，地域を対象とした医療機関が設置され，手工業，高地農業を中心とした産業振興が実施されるようになる．また教育でも現地人子弟をも受け容れる教育機関が登場して対象が拡大する．これが第Ⅲ期である．第２次大戦後，植民地主義の終焉を経て第Ⅳ期が始まる．第Ⅳ期の特徴は主体が現地人上層中産階級に移行したことであろう．余暇期間は短縮され，観光による来訪というパターンが一般化していく．

Mitchell はさらにヒルステーションにかかわる財・サービスフローと第Ⅰ～Ⅳ期からなる発展段階との関連についても論じている．第Ⅰ期は食品などの財一般，使用人などの労働力をはじめ，ほぼすべての財・サービスを外部に依存する消費コミュニティとして特徴付けられる．第Ⅱ期には宣教団による教育，医療，地域行政による公共サービスなど，自己充足部分の増加が見られるという．さらに第Ⅲ期になると，一定の手工業がヒルステーション内に生じ，周辺で生産された原材料

を加工して出荷する例が生じる．つまり純粋な消費コミュニティから，サービスの内製化，外部に対する財・サービスの提供へ，つまりより一般的な都市機能の獲得という移行過程が，ヒルステーションの発展形態として位置づけられることとなる．

この発展段階に呼応して，以下のヒルステーション類型が提示される．

1）official multi-functional hill-stations
2）private multi-functional hill-stations
3）single-purpose hill-stations
4）minor hill-stations
5）satellite hill-stations
6）multi-functional tourist hill-stations
7）single-purpose tourist hill-resorts
8）modern Indian hill-stations

1）～3）はそれぞれ第Ⅱ期に属している．1），2）は兵舎，学校，農園など様々な機能に対応する施設を備えたヒルステーションである．そのうち1）は「夏の首都」として植民地行政機能の移転あるいは軍司令部が置かれたところであり，2）はそうした経緯を持たないヒルステーションである．3）は軍駐屯地など特定の機能のみに特化したヒルステーションとして位置づけられている．

5），6）は第Ⅲ期に現れる類型とされる．様々な機能に多様化したヒルステーションが発展するにつれ，それらのヒルステーション内での施設拡充や新規展開用の立地が不足し始め，これらの新規需要を満たすために小規模なヒルステーションや，大規模なヒルステーションの近隣に付随的なヒルステーションが建設される．これが4），5）の類型である．

一方6）～8）は国民国家成立後に生じた国内観光客の余暇需要に対応したヒルステーションである．6）は植民地期に形成された多機能化したヒルステーションの利用主体が新興国家の国民に移行したものであり，7）はヒルステーションとみなしうる経緯を持たない高原都市が，気候条件から余暇センター化したものを指す．8）は気候条件をもとに新たに計画された余暇機能を持つコミュニティとして位置づけられている[3)]．

前記の発展段階は，ヒルステーションの機能，施設の変化，ことに外面的な変化に限って言えばおおむね首肯できる内容であろう．しかし現実妥当性，社会的背景を含めた分析からすれば，問題が多い．大きな問題の一つは，発展段階が固有のヒルステーションの変化を対象としているのか，あるいは時代を追って新たに建設されていくヒルステーションの変化を対象としているのかについての，厳密な規定はなされていない．ヒルステーションの建設はそれに先行するヒルステーションの経験に学んで変化していく．英国によって開発されたマレー半島のヒルステーションは，インドに遅れて開発が始まった関係で軍事的な色彩を持たない例が多く（Aiken, 1994），仏領インドシナのヒルステーションも当初から色濃くレジャー開発の色彩を持っていた（Jennings, 2012）．

インド国内でも150カ所を上回ると言われるヒルステーションが同様の発展過程をたどったわけではない．むしろヒルステーションの歴史的展開と現状は，それが置かれる立地条件，需要条件に応じてきわめて多様である．またヒルステーションの性格変化も，単なる機能の交替と捉えることは出来ない．多くの高度に発展したヒルステーションで見られるのは，発展にともなう機能の交替ではなく，新しい機能の付加というかたちでの多様化傾向である．実際に多くのヒルステーションはレジャー機能の傍ら，現在でも軍駐屯地という性格を持ち続けており，教育機関もかつての植民者の子弟，現地支配階級の子弟に対する教育から，現在では様々な国から生徒を受け入れるグローバル化した教育が進んでいる．教育はヒルステーションの特徴の一つとして，現在でも重要な役割を果たしている．ヒルステーションの教育機関の中には政治情勢その他の理由から，気候条件を求めて他国のヒルステーションに移転した例さえ見ることが出来る．植民地期からポストコロニアルへの連続性は，ヒルステーションを分析する上で欠かせない視点であろう．

Mitchellのヒルステーションの発展段階的理解は，ヒマラヤ山麓のシムラ，ムスーリ（Mussoorie），ナイニタールなどに代表される高度に発展したヒルステーションから逆算された，観念的，理念的な発展形態であり，かならずしもすべてのヒルス

テーションの状況を説明するものではない．また類型も観念的な発展段階説では説明することの出来ない多様性を説明するための便宜的な性格が強く，大きな分析力を持つとは言いがたい．

Mitchell の所論のもう一つの問題は，何故ヒルステーションという特殊なレジャー形態が，植民地で生活の必然性と言う文脈で生じたかという視点を欠くことであろう．このためヒルステーションが植民地の終焉を経ても続き，グローバル化する観光状況の中でも継続しているという事実を明らかにする分析枠組みとしては不足しているように思われる．

以上の議論をもとに，現在のヒルステーションの状況，ことにグローバル化の影響をスリランカの代表的ヒルステーションであるヌワラエリヤを例に見てみることにしよう．同時にそれを通じて，グローバル化された観光状況の中で，ヒルステーションを成立させた要件がどのような文脈の下で再解釈されているかを明らかにすることとしたい．

Ⅴ ヒルステーションのグローバル化―スリランカの事例

インドに比較しスリランカにおけるヒルステーションは未発達であった．ヒルステーションに関する最初の学問的研究と言われる（Spencer and Thomas, 1948）において，スリランカのヒルステーションとして挙げられているのはヌワラエリヤ，ディヤタラワ（Diyatalawa），バンダラウェーラ（Bandarawela），ハットン（Hatton）の４カ所であり，Westlake はヌワラエリヤ１カ所のみを挙げているに過ぎない（Westlake, 1993）．ヌワラエリヤを除く３地域も，軍駐屯地，軍関係保養施設，プランテーションの中心地として発展した経緯からヒルステーションとみなすことも不可能ではない．しかしヒルステーションとしての機能は限定されており余暇的色彩も薄く，ヌワラエリヤほどヒルステーションとして発展したと言うことは出来ない．この点ヌワラエリヤはインドのヒルステーションと比肩しうるスリランカで唯一の事例と言うことが出来よう．

ヌワラエリヤは前述の他３都市と同じく，スリランカの中央高地に立地している．標高は1,868m，年間平均気温は 20℃あまりでスリランカの平均を大きく下回っている．比較的標高の高い台地状の地形を構成しており，周囲の斜面には茶のプランテーションが広がっている．ヌワラエリヤは1819年 John Davy によって発見された（de Silva, 1975）．19 世紀後半までの発展はインドのヒルステーションほどではなかったものの，現在では複数のゴルフ場，競馬場，人造湖，植物園，植民地時代から続く公園，コロニアル建築などヒルステーションとしての雰囲気を残す観光地として多くの観光客を受け入れている．

近年，ヌワラエリヤ観光を特徴付けているのは中東諸国からの観光客の存在である．スリランカには地域ごとの信頼できる観光統計は存在しない．このためヌワラエリヤへの入り込み統計は存在せず，実数を把握することは困難である．中東からの観光客は 10 年ほど前から始まったと言われ（市観光案内所での聞き取り），現在では夏，秋のシーズンには主要ホテルの大半が中東からの観光客，ことにサウジアラビア，カタール，アラブ首長国連邦などからの観光客で占められている（Grand Hotel 広報担当者からの聞き取り）．

スリランカと中東諸国との結びつきは，当初出稼ぎを通じて始まった．現在でもサウジアラビア，湾岸諸国で家政婦として働くスリランカ人は多く，出稼ぎ先からの送金は同国にとって大きな外貨収入源となっている．表２はコロンボ国際空港の発地別週間到着便数である．南アジアの大半は歴史的に繋がりの深いタミルナドゥ

表２　コロンボ国際空港の発地別週間到着便数

発　地	便　数	構成比％
ヨーロッパ	32	6.8
中東	168	35.7
南アジア	165	35.0
東南アジア	70	14.9
北東アジア	34	7.2
その他	2	0.4
計	471	100.0

資料：コロンボ国際空港資料より作成
＊資料は 2014 年１月，臨時便・チャーター便は含まず

（Tamil Nadu）だが，中東各国からの便数は南アジア全体を上回る水準に達している．これを反映して，中東諸国からの入り込み観光客数の増加率は，2005年から2011年までの6年間で461.8%で，海外観光客全体の増加率55.8%を大きく上回っている．この結果2011年の中東からの入り込み観光客数は57,501人に達している．

前述の通りヌワラエリヤへの発地別観光客入り込み統計が公表されていないため，ヌワラエリヤを訪れる中東観光客の実数は明らかではない．スリランカの主たる観光地は最大の都市コロンボ（Colombo），コロンボ北方のネゴンボ（Negombo）から南海岸のハンバントータ（Hambantota）に至る南海岸と言われるビーチリゾート地域，アヌラーダプラ（Anuradhapura）とキャンディ（Kandy）を結ぶ文化三角地帯，ヌワラエリヤを中心とする中央高地である．中東観光客はビーチリゾートをほとんど訪れず，また仏教遺跡の文化三角地帯にも訪問しない．これを考えるとイスラエル人を除くほとんどの中東観光客が，中央高地ことにヌワラエリヤに集中していると考えよかろう．

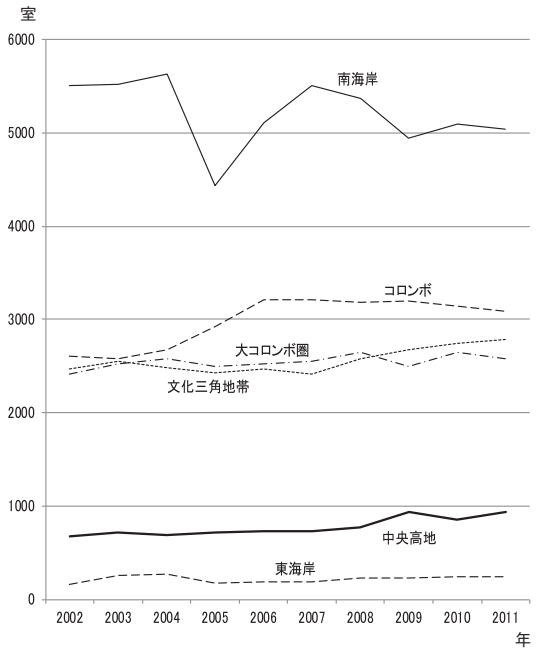


図1　スリランカ地域別客室供給推移
資料：*Annual Statistical Report* (*2011*), Sri Lanka Tourism Development Authority より作成

スリランカの客室供給の増加は低い水準にとどまっている．2002年から2011年までの増加率は全体で6.0%，これに対して中央高地の増加率は40.5%に達する．この期間，客室稼働率の推移を見ると，中央高地はほとんど他地域と同じ傾向を示しており，2011年も73.3%と他地域とあまり変わらない水準を維持している．しかし他地域の客室供給の増加が著しくない中，中央高地では40%を上回る客室供給増にもかかわらず他地域とほぼ同水準の客室稼働率を維持しており，宿泊客の絶対数はかなり増加していると見ることが出来よう，同時にその大きな部分が中東からの観光客で占められているとみなして良い．

スリランカに来訪する外国人観光客の国内平均滞在日数は発地による変動があまり見られず，ほぼ9～10日前後に集中している．しかし各観光地の状況は異なっている．ゲートウェイとしてのコロンボ，周遊型観光を基本とする文化三角地帯では1カ所に滞在する期間は短い．これに対して中東観光客は周遊しないため，ヌワラエリヤにおける平均滞在日数は他の地域からの観光客に比べて，かなり長くなる傾向がある．中東観光客を受け入れているホテルでの聞き取りでも，他地域からの観光客に比べ中東観光客の滞在は著しく長いという結果が得られている．

旧宗主国をはじめとして，西欧圏からヌワラエリヤに来訪する観光客は，現在でもヒルステーションに対するノスタルジックツアーの傾向を残している．これに対応して宿泊施設をはじめとして，植民地期からの建物を使っているか否かを問わず，コロニアルイメージを訴求する施設が少なくない．

中東観光客をもっとも多く収容しているのは，セイロン総督の屋敷を一部利用したグランドホテル（Grand Hotel）である．ヌワラエリヤ市はグランドホテル，ヒルクラブ（Hill Club），セントアンドリュース（St. Andrew's），セイバンクレスト（Ceybank Rest）の4カ所の宿泊施設をヘリテージホテルとして認定している．市が認定するヘリテージホテルとは，植民地期に遡る建築を利用した，一定以上の規模と施設水準を備えたホ

テルである．また中東観光客は別荘を改造したヴィラレンタルも多く利用している．しかしこれらの施設は，そのコロニアルイメージによって選択されているのではない．聞き取りによれば，グランドホテルは規模と施設の豊富さ，高いアメニティ水準によって選択されており，ヴィラレンタルも大家族で移動する中東観光客の旅行形態に適合しているために選ばれているに過ぎない．前記のヘリテージホテルのうち，セントアンドリュースは中東観光客による若干の利用があるもの，格式やコロニアルイメージをより強く打ち出しているヒルクラブ，セイバンクレストでは全く中東観光客の利用は見られない．

中東観光客のヌワラエリヤにおける観光行動も，スリランカ人観光客，あるいは他の外国人観光客とは大きく異なっている．かなりの観光客は散歩などを除き，ほとんどホテルから出ずにのんびりと過ごしている（中東観光客を受け入れているホテルでの聞き取り）．また多少ヌワラエリヤ周辺の観光をするとしても滝見物など負荷の低いレクリエーションが中心で，トレッキングなどに参加する例は少ない（ネイチャーツアーを行う観光ガイドからの聞き取り）．筆者の観察でも公園の散策など，身近な余暇行動を除き，中東観光客はあまり立ち回らず，ヌワラエリヤ中心部へと足を向けることも少ない．

中東観光客自身からの聞き取りでも，ヌワラエリヤ来訪の目的は涼しさを求めてという回答がほとんどであり，さらに高い湿度や霧，雨さえも魅力として語られることが多い．反面，植民地期に起因するコロニアルな雰囲気を挙げる例は皆無であった．中東観光客にとってヌワラエリヤは彼らの日常とは異化された気候条件の下でリラックスする場所，つまり避暑の場として位置づけられている．

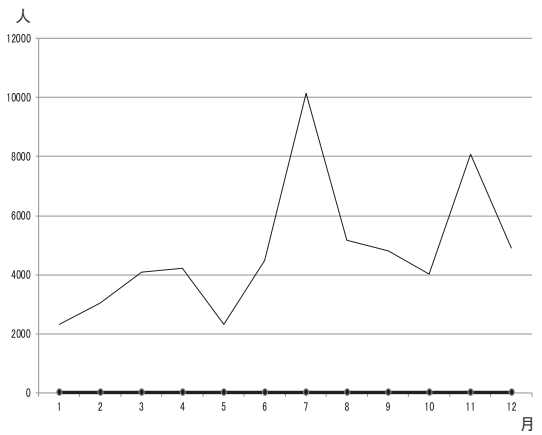


図２　中東観光客の月別入国変動

資料：*Annual Statistical Report*（*2011*）, Sri Lanka Tourism Development Authority より作成

ヒルステーションの成立は前述のように，西欧人植民者が植民地の山中に「自らの気候条件」とそれが生み出す「自らの環境」を見いだし，余暇を含む生活空間として再構成する行為であった．中東観光客は標高にともなう気候条件を，異化されたものとして受け取り，余暇として組み立てている．しかしそこで生み出される余暇行為は，ヒルステーションで西欧人が享受した避暑と酷似している．ヒルステーションにおける気候条件は，一定のかたちで解釈されるものではなく，グローバル化が進む現在，主体によって様々な解釈が可能な存在である．同時にこの解釈の幅は，植民地的伝統とは別なヒルステーションの可能性を生み出している．

謝　辞

本稿は科学研究費補助金「グローバル観光の原初的形態としてのヒルステーション」（基盤研究（C）代表者　稲垣勉）の調査結果をもとにしている．またスリランカに関する知見の一部は，13 年度にヌワラエリヤで実施した演習の調査合宿によっている．学術振興会，および厳しい条件の中，一緒に調査をしてくれた学生諸君に感謝を捧げる．

最後に，本年度をもって定年で退任される小沢健市先生について，思い出を語ることをお許しいただきたい．小沢先生には 1998 年の観光学部設置以来，大変お世話になり今日に至っている．この機会にこれまでのご厚情に感謝を申し述べたい．

小沢先生と本稿の主題であるヒルステーションにご一緒したことはない．しかし別件で継続的に実施してきた，ルアンパバーン（ラオス）の観光化の進展と地域の変化についての観察では，何回かご一緒する機会を得た．先生が初めてルアンパバーンを訪れた時のことは，長いおつきあいの中でも特に印象に残っている．当日は朝からの濃霧で，到着便は大きく遅延していた．霧が上がり強い日差しの下，空港に迎えに出た筆者と同僚は，空港で初めて到着便の遅延を知った．

まともに空調が効かないターミナルビルで待つわけにも

いかず，敷地外の茅葺きの簡易飲食店の一角で，暑さの中まどろみながら到着を待つことになった．やっと到着された小沢先生は，カシミヤのベストを着込まれ，平然としたお顔でタラップを降りられ，ターミナルに向かって歩いてこられた．それを見た筆者と同僚は，全身の汗が吹き出すのを感じていた．この滞在は，ちょうどチェンマイを真似たナイトバザールが始まった時にあたり，ナイトバザールはルアンパバーンの観光を大きく変えていくこととなった．まさにルアンパバーンの観光にとってエポックメーキングな瞬間に立ち会うことが出来たということになる．

その後も何回かご一緒したが，のんびりとした時間をご一緒させていただいた記憶はない．いつも筆者が慌ただしく，動き回っているためであろう．一度，メコンを見渡すテラスで地元ビールを酌み交わす，落ち着いたひとときを得たいものだと念願している．

注

1）ヒルステーションの成立を英領インドとオランダ領西インド諸島に求める見解は，ヒルステーション研究成立当初から存在した（Spencer and Thomas, 1948）．その後の論者の多くが，この見解を吟味せずに受け継いでいる．本稿ではヒルステーションの発展形態を論じるため，対象をヒルステーションが高度に発展したインドをはじめとする南アジアに限定している．

2）熱帯病の治療，予防を主たる目的とするヒルステーションの建設という理解は，かならずしも地政学的，戦略上の要衝としてヒルステーションが出発するという理解と相反するものではない．インドにおけるヒルステーションの多くは，インド測量局による踏査の結果，発見されている．これらの探検・調査はグルカの侵攻などの地域内問題，および南下するロシアあるいは清，チベットなどを対象とした戦略的要衝の発見，地図作成を目的とするものであった．この結果建設されたヒルステーションには軍が駐屯し，建設されるサナトリウムも当初は軍関係者を対象としていた．

3）気候条件やヒルステーションのイメージを利用した余暇施設，余暇コミュニティを稲垣は擬似ヒルステーションの一類型として定義づけている（稲垣，2012）．この種の擬似ヒルステーションの開発はマレーシアで顕著であり，ゲンティン・ハイランド（Genting Highlands），ブキッ・ティンギ（Bukit Tinggi）など顕著な例が見られる．

文　献

Aiken, S. Robert（1994）*Imperial Belvedere: The Hill Stations of Malaya*, Oxford University Press

Baker, Samuel W.（1874）*Eight Years in Ceylon*, Longman, Green, and Co.

Cordiner, James（1807）*Descriptions of Ceylon*, Longman, Hurst, Rees and Orme

de Silva, G. P. A. H.（1975）*Nuwara Eliya: The Beginnings and its Growth*, The Department of Information

Giles, George Michael（1904）*Climate and Health in Hot Countries and the Outlines of Tropical Climatology*, John Bale, Sons and Danielsson

Hardwicke, Herbert Junius（1883）*Health Resorts and Spas; or Climatic and Hygienic Treatment of Disease*, W. H. Allen & Co.

稲垣勉（2007）「研究対象としてのヒル・ステーション」『交流文化』6　立教大学観光学部

稲垣勉（2009）「ヒルステーションの概念規定に関する一考察―ヒルステーションの現象的側面に関するノート―」稲垣勉 , 杜国慶編『暮らしと観光―地域からの視座―』立教大学観光研究所

稲垣勉（2012）「擬似ヒルステーションの概念規定と国民化の様態」『立教大学観光学部紀要』14

稲垣勉（2013）「ヒルステーションの「取り戻し」―旧仏領インドシナにおけるカジノホテル開発」,『観光研究所だより』10（1）　立教大学観光研究所

Jennings, Eric T.（2011）*Imperial Heights: Dalat and the Making and Undoing of French Indochina*, University of California Press

Kanwar, Pamela（1990）*Imperial Simla*, Oxford University Press

Kennedy, Dane（1996）*The Magic Mountains: Hill Stations and the British Raj*, University of California Press

Mitchell, Nora（1972）*The Indian Hill-Station: Kodaikanal*, University of Chicago Department of Geography

Lal, Vinay（1997）“Hill Stations; Pinnacles of the Raj”, *Capitalism, Nature, Socialism*, 8(3)

Moore, William James（1881）*Health Resorts for Tropical Invalids in India, at Home, and Abroad*, J. & A. Churchill

Newall, D. J. F.（1882）*The Highlands of India*, Harrison and Sons

Pubby, Vipin（1988）*Shimla Then and Now*, Indus Publishing

Sandwith, F. M.（1907）“Hill Stations and Other Health Resorts in the British Tropics”, *The Journal of Tropical Medicine and Hygiene,* 22(10)

Spencer, J. E. and W. L. Thomas（1948）“The Hill Stations and Summer Resorts of the Orient”, *Geographical Review* 38(4)

Tyagi, Nutan（1991）*Hill Resorts of U.P. Himalaya: A Geographical Survey*, Indus Publishing

Ward, Robert DeC.,（1900）“Notes on Climatology”, *Journal of the American Geographical Society of New York*, 32 (5)

Westlake, Graeme D.（1993）*An Introduction to the Hill Stations of India*, Indus Publishing

Yeo, J. Burney（1885）*Climate and Health Resorts*, Chapman and Hall

■



写真 1　コロニアル建築の郵便局（ヌワラエリヤ）
市街地中心部に立地するコロニアル建築を利用した郵便局．ヒルステーションの雰囲気を色濃く残す建物で、ヌワラエリヤの象徴と考えられている．施設の一部は郵政通信省のゲストハウスとなっている．



写真 2　ヒルクラブ（ヌワラエリヤ）
ヒルクラブの歴史は 1876 年に設立された植民者クラブに遡る．植民地期には西欧人のみの会員制を採っていた．ほとんど全ての会員がスリランカ人になった現在でも会員制を維持し，ゲストとして宿泊客を受け入れている．



写真 3　グランドホテル外観（ヌワラエリヤ）
ヌワラエリヤを代表するヘリテージホテル，グランドホテルはセイロン総督 Edward Burnes の邸宅を改装して 1891 年に開業した．オリジナル部分はダイニングホールの一部だけで，大半は後年の増築である．



写真 4　グランドホテル・ラウンジ（ヌワラエリヤ）
グランドホテルの内部は，近代的なアメニティを確保するために改装されており往時の印象は薄い．ラウンジにはインターネット用の共用コンピュータが設置され，中東観光客が利用している．



写真 5　グランドホテルの水パイプ（ヌワラエリヤ）
ティーハウスには水パイプ（シーシャ）が備えられており，中東観光客に対応したサービスが行われている．



写真 6　聞き取りを受ける中東観光客（ヌワラエリヤ）
植民地期から続く市内のヴィクトリアパーク（Victoria Park）はグランドホテルからも近く，中東観光客の主たる立ち回り先になっている．